

ホワイトヘッドの思弁哲学の方法

—クワインの自然主義と比較して—

吉田 幸司

1. 序

ホワイトヘッドは『数学原理』の功績で、現代英米哲学の礎を築いた一人に数えられるが、1925年以降の彼の形而上学的試みについては、それがいかなる試みであったのか、今なお評価が定まっていないといえるだろう。無論、その哲学の内容については専門家を中心に詳細に研究されてきた¹。だが、“actual entity”や“eternal object”、“prehension”といった新奇な術語群で記述されたその哲学体系はいかなる企図をもって展開されたのか、また、その試み自体、いかなる意義を担うのか、という問題は往々にして見過ごされている。これらの問題にはさらに、なぜその哲学は理解しがたいのかという問題さえ付随している。

吉田（2016a）で筆者は、言語分析への関心や、明晰さと論証の重視といった分析哲学の特徴を指標として、ホワイトヘッド哲学の方法を考察したが、本稿では、クワインの自然主義との比較においてそれを考察する。クワインはホワイトヘッドのもとで『数学原理』に関わる博士論文を書いたとはいえ、形而上学期のホワイトヘッドから哲学的影響を受けたかどうかは定かではない²。だが、両者には共通する問題関心も多く見出せるのであり、本稿では、「経験主義の二つのドグマ」（1951年）（以下、「二つのドグマ」と略記）以降のクワインとの比較において、ホワイトヘッド哲学の方法を浮き彫りにしていく。特に「思弁」に注目することで、自然主義では汲み尽されないホワイトヘッド哲学固有の諸特徴を明らかにする。そうすることは、ホワイトヘッド哲学が全体として、現代哲学の思潮の中でいかなる位置づけにあるのかという問題の解明にも資することになるだろう。

2. ホワイトヘッドの思弁的図式

『過程と実在』（1929年）の序文では、「思弁哲学の不信」（PR viii）を払拭することが本書の試みの一つとして挙げられ、第I部「思弁的図式（The Speculative

Scheme)」の冒頭では、思弁哲学が次のように定義されている。

思弁哲学とは、我々の経験のあらゆる要素が、それによって解釈されうるような、一般的諸観念の整合的で論理的で必然的な体系を組み立てる努力である。この「解釈」という概念で私が意味するのは、我々が享受したり知覚したり意志したり思考したりしたときに我々が気づくものはすべて、一般的図式の特異な事例という性格をもつべきだ、ということである。したがって、哲学的図式は、整合的で論理的であり、その解釈に関しては、適用可能でかつ十全であるべきである。(PR 3)³

この箇所には、ホワイトヘッド哲学の二つの側面が見出せる。「整合的」と「論理的」はその合理的な側面を表しており、合理性にもとづいて体系が構築されねばならないことを示している。一方、「適用可能」と「十全」は思弁哲学の経験的な側面を表しており、体系は経験の諸要素がその特異な事例となるような一般的諸観念の図式であるということを示している。ホワイトヘッドにとって哲学的図式は、経験的な諸要素による例証を見出しながら合理的に構築される体系であり、思弁哲学とは、そのような仕方により一般的な諸原理を見出していく「前進」、ないしは絶え間ない「努力」であった。

この特徴は、肯定的にみれば、哲学体系が前進的に進歩していくことを示唆しているが、否定的にみれば、それがいつも不完全で途上にあることを示すだろう。実際、ホワイトヘッドは、一方で、一般理論の例証として示すことのできない要素が経験のうちに見出されなくなることは、合理主義の希望 (hope) であり、形而上学だけでなくすべての科学の探求の動機を形成する信念 (faith) であるという (PR 42)。しかし、他方で、「努力」や「前進」という言葉は、そうした希望が完全に達成されることはないことを含意し、終極的な図式が実現されないことをも暗示している。ホワイトヘッドは、哲学の図式は必然的であるべきだと考える一方で、哲学的探求をどこかで線引きして得られる図式を究極的なものとして仕立て上げるようなことを独断的だとも考えていた (cf. PR xiv)。上記の合理主義の希望も形而上学的前提ではないのであって、すべての形而上学体系には不完全性がつきまとい、我々はその希望を失うことに開かれている。この点に関してホワイトヘッドは、理論がそれを理論化するところの素材として『与えられた』要素が常に存在し、「宇宙におけるすべての要素を『理論』によって説明できる」という主張には限界がなければならない」と述べる (PR 42)⁴。

こうした合理主義と経験主義の二つの側面は、一見、矛盾しているようにみえるが、ホワイトヘッド哲学はそれら両面を保持する、もしくは両面の境界を曖昧にする。クワインとの共通点もこの点にあり、次節で考察してみたい。

3. 経験主義の二つのドグマの批判をめぐって

哲学の図式体系は、合理的であろうとする一方で、経験的事実によりいつも不完全で途上にあるジレンマを抱えていることになるが、ホワイトヘッドによれば、哲学の合理的側面と経験的側面は、「十全」という用語の説明に含まれる曖昧さを除去することによって結びつけられる (cf. PR 3)。

「十全」とは、図式によって解釈できない経験の要素の事項がないことであり、彼は確かに、「哲学の図式は、その図式自身のうちに、あらゆる経験に通ずる普遍性を自らの保証として身につけているという意味で、『必然的 (necessary)』であるべきだ」(PR 4) という。しかしその際、「直接的な事態と交流する (communicate) ものに我々の注意を制限するなら」という但し書きがつけられている。交流がないものは知りえず、知りえないものは知られない。したがって、普遍性は「『交流』で限定された普遍性」で十分だとホワイトヘッドはいうのだが、これは、必然性という概念が経験的要素から分離されえないことを示唆しているとともに、「剥き出しの事実 (brute fact)」により体系はいつも修正の必要性に脅かされているということも含意している。注目すべきは、「論理的諸概念は、自分の地位を哲学的諸概念の図式の中に、自ら見出さなければならない」(PR 3) と述べられている通り、論理学的概念や規則でさえも、哲学の図式の変容により修正を迫られると考えられている点である。ある体系の整合性や、体系が則る論理は、経験的要素と切り離せないのであって、アプリアリに恒常的に真となる命題はなく、哲学の合理的側面と経験的側面には厳密な境界線がない。

こうした考えには、クワインが「二つのドグマ」で批判したこととの共通点が見出せる。クワインは、カルナップらの経験主義 (論理実証主義) に含まれる二つのドグマを批判した。分析的真理と総合的真理の間に根本的な分裂があるという信念と、還元主義の信念の批判である (TD 20: 31)。後者は、個々の言明が他の諸言明とは独立に確証されたり反証されたりすると考えるドグマとも言い換えられる。これに代えてクワインは、「外的世界についてのわれわれの言明は、個々独立にではなく、ひとつの団体として、感覚的経験の裁きに直面する」(TD 41: 61) というホーリズムのテーゼを提唱したのであった。

無論、二つのドグマの批判は相互に関連している。クワインによれば、「地理や歴史についてのごくありふれた事柄から、原子物理学、さらには純粋数学や論理に属するきわめて深遠な法則に至るまで、われわれのいわゆる知識や信念の総体は、周縁に沿ってのみ経験と接する人工の構築物である」(TD 42: 63)。それは、複数の言明から成り立ち、周縁部で経験と衝突すれば、その内部の再調整さえ引き起こされる。その際、どの言明を再評価すべきかに関しては様々な選択肢があるのであって、特定の経験が、体系内の特定の言明と個別に結びついているわけではない。そればかりか、「ある言明の再評価は、言明間の論理的相互連関のゆえに、他の言明の再評価を伴う」(TD 42: 63 傍点筆者)だけでなく、論理法則でさえも、「それ自身、同じ体系のなかのもうひとつの言明、同じ場のなかのもうひとつの要素にすぎない」(TD 42: 63)。量子論理における排中律の改訂が事例の一つとなるように、論理法則さえも再評価されうる。クワインにしたがえば、「経験に依存して成り立つ総合的言明と、何が起ころうとも成り立つ分析的言明とのあいだの境界を探し求めることは、愚かなこととなる」(TD 43: 64)。

総合的言明と分析的言明に厳密な境界がないとホワイトヘッドも考えていたことは既述の通りだが、体系内の諸言明が有機的に関係づけられているというホーリズムの発想も『過程と実在』に見出せる。ホワイトヘッドの診断するところ、「哲学は、その方法が、独断的にも、それぞれ明晰で判明で確実であるような諸前提を示すことであり、そのような諸前提にもとづいて演繹的な思考体系を構築することである、という不運な考えにとりつかれてきた」(PR 8)。これは、基礎づけ主義の批判であるとともに、論理的推論を過信することへの批判でもある。というのも、一連の推論から矛盾が生じるとき、導かれるべき論理的帰結は、推論に含まれる諸前提のうち、「少なくとも一つが誤っている」ということに過ぎない (PR 8)。例えば、何らかのテーゼを立てそこから矛盾が帰結しても、推論過程の少なくとも一つが誤りであったに過ぎないのかもしれない。それどころか、何か隠された前提があつてそれが間違っていただけかもしれない。哲学であれ科学であれ、体系の命題を $P_1 \wedge P_2 \wedge \dots \wedge P_n$ といった風にすべて連言で結ぶなら、そのうちの一つが偽である限り、その体系全体が偽になる。したがって、「満足のいく形而上学体系」となる「範疇的図式 (categorical scheme)」を構築するまでは、「哲学的議論のどの前提も疑わしい」と、ホワイトヘッドは皮肉ながら論じる (PR 8)。

かくして、ホワイトヘッドは体系内の論理的欠陥をさほど咎めない。むしろ、哲学にとって「論理的矛盾は通常、枝葉末節だ」と述べた上で、哲学の体系が本当に悩み苦しむのは「不十全性 (inadequacy)」と「不整合性 (incoherence)」だと

指摘する (PR 6)。論理的矛盾より、むしろ、ある体系が、その範囲内で扱われるはずの歴然たる経験の諸要素を含み損ない、十全ではないことの方が致命的になりかねないというのだ。というのも、体系が十全でないことは、現にある事実を厚かましくも否認していることに等しいからである。そればかりか、そうした要素を体系内で解釈しようとするとき、不整合に陥ることさえある。ホワイトヘッドによれば、不整合があっても何か新しさの魅力を保有している哲学体系は、不整合に対する免償を受ける。だが、正統性を獲得し、権威をもって教えられるようになった体系については、不整合があれば批判に晒され、ついに不整合が我慢ならなくなるとき反動が始まる。「哲学の体系というものは論破されることはない、ただ廃棄されるだけだ、ということが認められてきた」(PR 6) とホワイトヘッドが述べるように、経験の諸要素を解釈できず不整合を容認できなくなるとき、その哲学の権威は失墜する。「剥き出しの事実」は無際限にあるから、修正を免れる終極的な哲学などというものはなく、「どの哲学も順番に廃位を経験するであろう」(PR 7) とさえ予言される。

それにしても、どの哲学体系も廃位するとしたら相対主義に陥りはしないだろうか。ある体系が採用される基準は何だろうか。次節では、この点に関わるクワインの考えをまずはみてみたい。

4. クワインの自然主義とその問題点

ホーリズムの帰結として、石や机、素粒子といった物理的対象は、認識論的には、ホメーロスの神々と比べられるような「文化的措定物」に過ぎなくなる。両者の間には程度の差があるだけである。科学も、認識論的身分としては「人工の構築物」である信念体系であって、他の神話と並べられる神話の一種となる。このことは哲学体系にもあてはまり、哲学の諸概念も、科学における力やエネルギーといった概念と同様の措定物に他ならない。したがって、この考えからは、「存在論的問いは、自然科学の問いと同じ身分をもつ」(TD 45: 67) ことになり、「思弁的形而上学と自然科学のあいだにあると考えられてきた境界がぼやけてくること」(TD 20: 31) になる。

しかしながら、「人工の構築物」としての信念体系が様々にあるといっても、無差別であるわけではない。経験の諸要素を説明する際の「効率性」や「単純さ」、「扱いやすさ」を指標として、信念体系には優劣がつけられる⁵。ここには、どの信念体系が優れているかの基準があり、二つのドグマを放棄することのもう一つ

の結果である「プラグマティズムへの方向転換」(TD 20: 31)が見出せるだろう。特にホワイトヘッドとの比較で注目すべきは、「体系全体をできるだけ乱すまいというわれわれの自然な傾向」(TD 44: 65)としての「保守主義」なのだが、まず本節で問題としたいのは、クワインの科学への偏重と自然主義的態度である。彼は、科学と形而上学の境界が曖昧になることを主張したにもかかわらず、科学に多大な信頼を寄せている。「二つのドグマ」で、最も優れていると評価されるのは科学という概念図式 (conceptual scheme) であり、「素人の物理学者として、物理的対象の存在を信じ、ホメーロスの神々の存在を信じない。また、それとは逆の信じ方をするのは、科学的に誤りであると考える」(TD 44: 66)と語られている。

こうした態度は、のちに自然主義に徹底される。晩年の『真理を追って』(1990年)でクワインは、「自然化された認識論」では「規範的要素」が無視されているという批判に反論している。そこで彼が認める規範は、「はじめに感覚のなかになくはないものは精神のなかになくはない」という経験論の標語であり (PT 19: 27)、また、「仮説に求められる五つの徳目」としての「保守性、一般性、単純性、反駁可能性、謙虚さ」である (PT 20: 28)⁶。その反論の骨子は、「理論的認識論が自然化されて理論的科学の一章となるように、規範的認識論もまた自然化されて工学の一章に、すなわち感覚的な刺激過程を予知するテクノロジーになる」(PT 19: 27)ということにある。つまりクワインは、経験論の規範や五つの徳目さえも、自然科学的探究の中で発見されるというのである。これは、例えば、誤差範囲や確率的偏差などの統計学の諸概念が科学的探究の規範として機能していることを考えればよい (PT 20: 28)。クワインは、諸体系の優劣の基準となる徳目が科学的探究の中で獲得されると考えるとともに、経験論の標語のもとで探究される科学の体系を推奨していたといえるだろう。

だが、この点に関して小林は、上記の経験論の標語はアリストテレス主義の大原則であって近代科学の大前提ではないと指摘し、また他の徳目はメタ科学の概念であり、自然主義の枠を超えるものだとして批判する⁷。むしろ、近・現代の物理学は、アリストテレスの自然学の認識論的枠組みをその根本から解体することで形成されたのであり、ガリレオやデカルトによって形成された近代科学は、「抽象的な数学が自然学の理論の軸を構成するとする立場において形成されたもの」なのである。小林によれば、「このような、近代科学の形成の事情やその本性あるいは前提を理解することは、もちろん、クワインの自然主義でできることではない」。

ホワイトヘッドの形而上学も、近代科学の成立要件を歴史的に跡づけることに始まり、最初の形而上学的著作『科学と近代世界』(1925年)では、コイレやバ

タフィールドらに先駆けて、科学革命について論じられている。特に『理性の機能』(1929年)を中心に各著作で、ホワイトヘッドは思弁的理性の重要性を説いていた。クワインとの差異が際立ってくるのもこの点であり、次に、この点に関するホワイトヘッドの考えをみてみよう。

5. ホワイトヘッドの思弁的理性

ホワイトヘッドにも、科学と哲学・形而上学の境界を曖昧にし、哲学・形而上学を科学と同種のものと考えer一面がある。例えば、「当面の主題に有効に適用可能な最も一般的な諸観念の発見に主に力点を置くような科学の揺籃期には、哲学は科学と明確に区別されなかった」(PR 10)と述べたり、「科学は特殊な種を探究すべきであり、形而上学はそれらの種の特殊な諸原理がそこに落ち着く類的観念を探究すべきである」(PR 116)といて科学と形而上学が相対的に区別されたりしている。しかし、ホワイトヘッドも前節の経験論の標語や自然主義の枠内にとどまっていたかといえそうではない。むしろ、彼は「思弁」に自然主義以上のものを認める。それを論じるにあたっては彼の理性論に注目するのがよい。

行動心理学や進化論の知見をもって認識論を自然化しようとしたクワインと類似して、ホワイトヘッドも、理性の原初的形態を動物のうちに見出し、進化過程のうち位置づける。ただし、環境に適応した種は生き残り、適応しない種は絶滅していく「適者生存」の原理が自然の事実として認められるものの、それだけでは一突然変異の説をもちだしたとしても一なぜ進化が上向きであったのかを説明するのに不十分だという⁸。この問いについてホワイトヘッドは、「環境に対するとつきみあいの方向づけ(指揮 direction)」(FR 8)を「理性の第一の機能」と捉えた上で、この原初的で実践的な理性の働きに、進化の上向きの傾向の理由を見出す。例えばビーバーは、木を切り倒して川をせき止める際、それが事実として実現される前段階として、環境を改善しようとしているに違いない。その試みは、現にある事実とは違う可能性を模索し、事実と可能性を対比する働きがなければ不可能であろう。『過程と実在』で意識は、事実と別の可能性とのコントラストを感受する主体的形式と定義されるが、動物にも、自らの衝動を方向づける選択的な作用としての理性が備わっている(cf. FR 24)⁹。「理性の機能とは生の技巧(art of life)を増進させることである」(FR 4)と定義され、「(1) 生きること、(2) うまく生きること、(3) よりよく生きること」(FR 8)の三段階に区別されるが、動物は、自らの生存をかけてうまく生きていこうとしている点で、原初的

な理性を行使していると考えられる。

自然選択や突然変異の説に加えて、こうした理性が進化を上向きにするのだが、注目すべきことに、そうした理性は、「事実としては実現されていないが、想像のうちで実現された目的の達成に向かう衝動を方向づけ批判する、経験に含まれる一要因である」(FR 8 傍点筆者)と考えられている。自然の説明に目的因を認めるかどうかはさておき、それは、「動物身体の中に含まれる働きの一つ」(FR 9)であって自然の一事実に他ならない。厳しい環境に立ち向かって形成していく実践的な方法が、ただあるだけである。ここには、理性を経験世界から超出したものとして特権化せず、認識論の自然化を説いたクワインと同様の姿勢がみられる。

こうした理性は「実践的理性」もしくは「方法論的理性」と呼ばれるが、有用性に制約され、実際の目的が有効となる限界内で機能するに過ぎない。それは、課題をやり遂げることに向けられ、その機能を満たすことにおいて自己満足する (cf. FR 37)。逆に言えば、「方法の範囲を超えたところでは、われ関せず」(FR 17)であり、また、ある課題の中で方法が洗練されるにしても、やがて使い古され、取るに足らない問題を扱うことになる。

これに対して、「任意の特殊な動物の働きから抽象化して取り出したもの」(FR 9)としての理性は「思弁的理性」と呼ばれる。それは、「利害関係のない好奇心をもって世界の理解を探究する」理性である (FR 37f.)。思弁的理性を駆り立てるのは、すべての特殊な事実が、一般的諸原理のもとで、その諸原理を例証するものとして理解されうるという究極的信念であり、「経験が理解されたということが、思弁的理性の唯一の満足である」(FR 38)。逆に、「理解が不完全である限り、その程度において理性は不満足にとどまる」(FR 38)。これらは、第2節で言及した思弁哲学の定義や合理主義の理想にも合致するとともに、知性的な満足に心の平安を説いたブラッドリーの思想にも通じている¹⁰。

自然主義との比較において注目すべきは、思弁的理性は、「直接的観察の範囲をはるかに超えた想像力」により図式を産出すると考えられている点である (FR 71)。例えば、重力場による光のスペクトルの赤方偏移は、その直接的証拠がわずかしかなくとも容認されているという一般相対論の例をホワイトヘッドは挙げる。それが容認されているのは、支配的となっている科学的図式のうちに置かれるからであり、その図式の思弁的側面が重要性を発揮しているからである。確かに「思考も経験の事実に含まれる一要因である」(FR 80)。だが、それは、事実そのものではない一般的諸観念の図式を構築しようとし、単なる事実には還元できない理想に関わる。思弁的理性の規律 (discipline) は直接的事実を超え、「思考をして未

来を創造せしめることが思弁の仕事である」(FR 82)。その際、「思弁は、観察を含みながらも観察を超えて一般化される観念体系の展望 (vision) によって、この仕事を達成する」(FR 82)。その功績は、まずもって古代ギリシアの思想家たち、とりわけプラトンに帰せられる。彼らにより思弁的理性が論理学や数学と結びつくことで、知は進歩してきた。

しかも、知の進歩は文明の進歩でもあり、また、思弁的理性は「理解のよさとともに、生をよくしようと求める」(FR 38)。それは、自ら「よりよい生」を築こうとし、それを「よりよい理解」によって達成しようとするホワイトヘッドはいう。確かに、現実を生きていく上では、生きることや世界の全体を理解することは、必ずしも必要ではないかもしれない。むしろ、面前の課題を解決したり目的を達成したりする実践的理性の方が有用であろう。しかし、思弁的理性は、「ただ自分自身のみには仕える」(FR 38) のであり、有用性や目的に制約されずに自由に探究する¹¹。そうしてそれは自己超越し、図式を刷新し、理論的理解を蓄積する。実践的理性がその限界内で惰性化して、生は同じサイクルの反復に落ち込んでいくのに対して、思弁的理性は、新しさを求め、「退屈」や「ただ生きること」に抗する「逆趨勢 (counter-tendency)」(FR 90) の働きとして機能する。「よりよい理解」を通じて「よりよい生」への「冒険」に乗り出すのである。実践的理性がその目的に制約されるため、予期せぬ危機的瞬間に無力となったときでも、思弁的理性は新たな方法論に向けてなされるべき移行を可能ならしめるのであり (FR 39)、この点で思弁的理性は「世界を救う」ことにもなる (FR 34, 76)。

もっとも、クワインも、哲学の自然化を推進したとはいえ、全体としての世界を理解したいと考えていた¹²。だが、自然主義は世界の全体的眺望を与えず、また、環境世界の意味や人生の意味を問えないという論者も多い¹³。ホワイトヘッド哲学はむしろ、自然化できない生や文明の価値も包括して論じるとともに、世界の全体的眺望を与えようとするのであった。では、思弁的理性についてこのように論じた上で、実際にホワイトヘッドはいかなる試みをおこなったのか。

6. ホワイトヘッドによる哲学の革命

ホワイトヘッドの哲学体系は、当時の諸科学を統合し、様々な学問に通底する普遍的な諸原理を定式化する中で構築されたが、生や文明の価値も問題としていた。特に、クワインが、ある体系を優位に選択する指標として「保守主義」を挙げたのに対して、ホワイトヘッドは、むしろ「冒険」を「よりよい生」の実現や

文明の存続と発展に不可欠な要素とみる。

実際、ホワイトヘッドの哲学自体が冒険的な試みだったといえる。独自の術語群で構築された体系は、主体 - 客体、実体 - 属性、個物 - 普遍といった伝統的な哲学用語の制約を脱して、新たな哲学する言語を開発する試みだったと評価できる。なぜ独自の術語を作る必要があったのか、それらにどのような意義があるのかといえば、それは、最初、近代の科学的唯物論の概念図式を脱構築し、相対論や量子論、創発的進化論といった 20 世紀初頭の科学にも適合するかたちで哲学の図式を構築し直すためであった。どの時代の哲学にも、意識されていない隠れた前提があるが、ホワイトヘッドは科学的唯物論の前提を問い、その図式では覆い隠された、より精妙な事柄を明るみに出そうとした (cf. SMW 48)。例えば、諸事物の有機的な関係や、自然の動的な生成のプロセスなどがそれである。特に、我々の経験のみならず、世界の進展も「感受 (feeling)」の展開として記述される通り、その哲学は情感的で質的な経験を根源に据え、生や文明の価値に関する観点を含んでいる点で、価値中立的で事実に記述を尊重する科学的図式とは異なる。

これらの内容については他のホワイトヘッド研究に譲るが、哲学の方法に関して特筆すべきは、ホワイトヘッドの図式が科学的唯物論の図式より精密で、前者が後者を包括して説明できる点で科学的唯物論の図式よりも優れているという点である。ホワイトヘッドの図式は、科学的唯物論や伝統的な哲学の図式を葬り去ったのではない。前者は、後者を特殊なものとして包摂する点でより一般的であり、哲学の前進とは、一般化の成功だと考えられる。ここに自由で想像的な思弁の役割も認められる (PR 5)。科学的唯物論はそれが依って立つ形而上学的背景を問うことなく、その諸前提に甘んじて体系化されていたのに対して、哲学の営為は、ドグマとなっている諸前提を疑い、より一般的な諸原理を探究していくことにある。この点で哲学は科学とは異なる。ホワイトヘッドの哲学体系は、科学的唯物論の背景をなす形而上学、さらには、ドグマとして固定化された既存の哲学の諸概念や枠組みをも鋳直すことで構築された、より一般的な図式体系であり、「よりよい理解」をもたらすものであった。

こうした考えは、第 2 節でみた通り、終極的な哲学的図式を肯定するには至らないものの、諸体系に優劣をつけられる点で相対主義を免れることはできる。だが、ここで、独自の術語で記述されたホワイトヘッドの体系はいかにして理解できるのかという問題は残る。クワインの保守主義と争点になるのもこの点である。

「二つのドグマ」では保守主義の採用理由が詳論されていなかったが、『ことばと対象』(1960 年) では、言語の問題に関連させたさらなる考察がある。クワイ

ンは、科学と哲学の境界を曖昧にしたものの、「暗黙裡に潜んでいたものを白日の下に引き出し、不明瞭であったものを精確にする仕事」が存在論の課題であり、この点で哲学は科学とは違うという (WO 254: 459)。だが、哲学も、科学や常識と交流する概念図式がなければ、それらの改訂もできなくなるのであり、概念図式の外に立つ「宇宙的亡命」など存在しないとも主張する。クワインによれば、「われわれの船が浮かんだままでいられるのも、それぞれの改造に際してその大部分には手をつけず、船を動かしたままにしておくからである。われわれは、理論が連続的に変化するがゆえに、語の意味をなんとか理解し続けることができる」(WO 4: 6)。かくして、諸体系の、あるいは言語の交流が可能であるために、保守主義は必須なのだと考えられる。

だが、哲学の船全体を一夜にして改造してしまったのが、ホワイトヘッドの哲学体系、特に『過程と実在』であろう。これはどのように理解できるのか。これに類似した問いとして、丹治は、もし保守主義が言語にとって本質的ならば、科学革命のような大改造のプロセスの中の「言語理解」はどうなるのかと問うている¹⁴。丹治は、クワイン自身はこれに全く触れていないといい、自ら次のように答える。すなわち、大改造は「対話の円滑さ」の低下を伴うが、大改造を提案する人は、それを償うために、なぜ従来の理論を否定し、そのような新たな理論を提案するのかについて十分な説明・論証をしなければならない。しかも、その説明・論証は、従来の信念体系のうちの、その大改造で否定されずに残った部分にもとづいて与えられなければならない。なぜなら、提案者と他の人々との共通の基盤は、そこにしかないからである。それは、新しい理論の正しさを説得するためとまでいわなくとも、言語理解が維持されるために説明・論証が必要なのであると丹治は論じる。

実際、ホワイトヘッドの哲学体系を、初めから理解できるものはいないだろう。では、どのように理解可能になるかといえば、理解可能な言語を通じて、各術語の用法を学ぶしかない。特に『過程と実在』の第Ⅱ部は、既存の哲学と関係づける役割を担うと序文で宣言されている (PR xi)。その他、各著作で、ある術語の発想がどこで得られたのかを示唆している場合もある。例えば、“prehension”はライプニッツから着想が得られ、“feeling”はブラッドリーやジェームズの用法に由来していると記されている (AI 234, 231f.)。丹治は、言語の安定性、保守主義が、言語コミュニケーションの成立条件だというのが、ホワイトヘッドの哲学体系を理解するのが難しいのは、わずかな共通基盤に頼らねばならないためであり、それを理解するためには既存の言語理解との接続が必要になると筆者は考える。

しかし、たとえそうだととしても、ホワイトヘッドは、既述した思弁的理性の思想を背景に、保守主義よりも「観念の冒険」を重視し、哲学の革命を試みた。彼の哲学体系は、日常言語や従来の哲学用語に完全には翻訳できない。それらはあまりにも粗雑過ぎるからである。ホワイトヘッドの哲学体系は、従来の言語では示し得なかった事柄を記述した図式である。無論、それは終極的なものではないが、その理由は世界が複雑だからであり、「洞察の弱さと言語の欠陥が容赦なく立ち上がる」（PR 4）からである。こうした問題に対してホワイトヘッドがとった哲学の方法とは、意味が一義的に確定したものとして言語を分析するのではなく、語や句を、日常的用法とは縁のない一般性へ拡張し、独自の術語からなる体系を構築するものだった¹⁵。科学や日常言語、さらには従来の哲学の形而上学的前提を遡っていく営みである点で、哲学が完全に自然化されることもない。思弁哲学は、経験的事実による例証を見出しつつも、実用性を離れた「自由な想像力の遊び」（PR 5）として、ただ世界の全体的展望の理解を追い求めるのである。

7. 結語

以上、本稿では、クワインの自然主義との比較においてホワイトヘッドの思弁哲学の方法をみてきた。その結果、経験主義の二つのドグマに関する批判において、両者には共通する考えが見出せたが、ある体系を採用する際の基準に関して両者の違いも浮き彫りになった。特に、クワインが保守主義を重視したのに対して、ホワイトヘッドは思弁的理性による観念の冒険を重視するとともに、自然主義におさまらない生や文明の価値を、その哲学において包括して論じる点でクワインと袂を分かち点を明らかにした。独自の術語で記述されたホワイトヘッドの体系は、確かに既存の言語との連続性の中でしか理解されないだろうが、完全に翻訳されることはなく、むしろそれは、既存の言語では示しえなかった精妙な事柄を記述し、世界の全体的展望を理解する試みになっているのである。

なお、ホワイトヘッドが自然主義を逸脱するのは、思弁哲学の冒険性、生や文明の価値を説く点だけではない。彼は、はじめに感覚の中にないものが精神、特に神の精神のうちにあると認める点でクワインと決定的に一線を画する。それらは文明の理想や宗教に関わるが、科学的研究の対象となるものではなく、科学の言説とは異なる言説に属するものであろう。それは、第5節でみたように、直接的事実を超え、文明の未来を創造しようとする際の展望に関わる言説であり、ホワイトヘッドの哲学的神学における神も、そうした展望を示すものとして機能す

ると筆者は考えているが、この点についてのさらなる考察は稿を改めて論じたい。

* 本稿は科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。

* 本稿は2016年10月9日に立正大学で開催された日本ホワイトヘッド・プロセス学会第38回全国大会で口頭発表した原稿に大幅な加筆・修正を加えたものである。

¹ ホワイトヘッドの研究史については吉田（2014）を参照されたい。

² クワインは、「科学と近代世界」や「古代と近代の宇宙論」の講義を受けたとき、「私のノートは落書きで埋め尽くされた」と述べ、ホワイトヘッドからの哲学的影響を認めない（AQ 9-10）。McHenry（2003）では、この点が指摘されつつも、両者の存在論に関する比較研究が試みられている。特に、ホワイトヘッドが形而上学を展開する以前の自然哲学について、出来事や物理的対象に関するクワインの思想との共通点・相違点が考察されるとともに、両者の科学観や自然主義的態度の親近性も見出される。その議論はHolmgren & McHenry（2012）でも継続されているが、形而上学期の比較研究は主題にされていないばかりか、なぜホワイトヘッドが極めて独特な哲学体系を構築するに至ったのか、その理由と意義については考察されていない。本稿の独自性は、クワインとの比較においてこの点を考究する点にある。

³ ここで「整合性（coherence）」は、「図式がそれによって展開されるころの基本的諸観念が、相互に前提しあっていて、孤立するならば意味を失ってしまうこと」と言い換えられている。「論理的（logical）」は、矛盾を含まないことや推論の諸原理に則っていることなど、論理的という言葉の通常の意味で理解してよい。「適用可能（applicable）」は「経験の諸事項がこれこれと解釈できること」を意味し、「十全（adequate）」は「そのような解釈が不可能な事項が存在しないこと」を意味している（PR 3）。

⁴ この箇所はA. E. テイラーの著作を引用しながら述べられている。Taylor（1960, 455）も参照。

⁵ 「物理的対象の神話が多く他の神話よりも認識論的に優れているのは、経験の流れのなかに扱いやすい構造を見いだす手だてとして、それが他の神話よりも効率がよいことがわかっているためである」（TD 44: 66）とクワインは述べる。また、巨視的な物理的対象だけでなく、原子レベルの対象を指定するのは、「経験についての法則を、より単純かつ扱いやすくするため」だともいわれる（TD 44: 66）。

⁶ 『信念の網』（1970年）では5つの徳目について詳論されている（WB 66-82）。また、「自然化された認識論」（1969年）でも、「感覚受容器における刺激が、世界の描像を獲得するさいに誰もが最終的に受け入れざるをえない証拠のすべてである」（EN 75: 52）と述べている。

⁷ 以下、小林（2008, 47-50）を参照。

⁸ 宇宙は、物質的なものへ退行し、より単純なものへ崩壊しても構わないにもかかわらず、実際には、より複雑に統一された存在が創造されてきたという意味で上向きに進化してきた。ホワイトヘッドは、英国の創発的進化論から影響を受け、経験の強度（intensity）を高める精神的なもの（永遠的客体）の実現こそが、そうした進化を可能ならしめると考えている。この点については吉田（2017）で詳しく論じたので参照されたい。

⁹ 『過程と実在』で意識は「誤っているかもしれない『理論』と、『所与の』事実とのコントラストを感受するときに含まれる主体的形式」（PR 161）と定義されている。こうした発想には、ベルグソンや進化論の影響があったと考えられる。詳しくは吉田（2010）を参照されたい。

¹⁰ この点については吉田（2016b）を参照されたい。

¹¹ 田口（2014）では、思弁的理性の越境的・攪乱的性格について詳しく論じられている。

¹² 丹治（2009, 285）を参照。

¹³ 例えば、飯田は、「哲学は完全には自然化できない」と主張するとともに、「われわれの誰もがその人生のどこかで、自分がその一部である世界についての全体的眺望を得たいと望む」が、自然主義はその全体的眺望を与えないという（飯田 2007, 669-70）。また、小林も、「近・現代の科学が、生の知覚経験によるのではなく、『数学的・記号的体系』に従って推進されるものであり、その作業においては『価値的意味』というものは最初から排除されるがゆえに、科学はその本性からして、この、生の環境世界の『意味』や、一回かぎりのわれわれの人生の

『意味』を扱いうるものではない」という (小林 2008, 50-1)。

¹⁴ 以下、丹治 (2009, 159-60) を参照。また、丹治 (1996, 188-211) も参照。

¹⁵ この点については吉田 (2016a) で詳しく論じたので参照されたい。

[参考文献]

ホワイトヘッドとクワインの著作からの引用は以下のように略記し、当該箇所を付記する。また、邦訳も参照したものは、対応する邦訳の頁数をコロン afterwards に付記する。

- Whitehead, Alfred N. 1967. *Science and the Modern World*, The Free Press. (SMW)
 ———. 1978. *Process and Reality*, David R. Griffin & Donald W. Sherburne (eds.), The Free Press. (PR)
 ———. 1958. *The Function of Reason*, Beacon Press. (FR)
 ———. 1967. *Adventures of Ideas*, The Free Press. (AI)
- Quine, Willard V. O. 1980. “Two Dogmas of Empiricism,” in *From a Logical Point of View*, 2nd edition, Harvard University Press, 20-46. (クワイン, ウィラード・V. O. 1992. 「経験主義のふたつのドグマ」, 『論理的観点から』, 飯田隆訳, 勁草書房, 31-70.) (TD)
 ———. 1960. *Word and Object*, New edition, The MIT Press. (クワイン, ウィラード・V. O. 1984. 『ことばと対象』, 大出晃・宮館恵訳, 勁草書房.) (WO)
 ———. 1969. “Epistemology Naturalized,” in *Ontological Relativity & Other Essays*, Columbia University Press, 69-90. (クワイン, ウィラード・V. O. 1988. 「自然化された認識論」, 伊藤春樹訳, 『現代思想』, 第16巻第8号, 青土社, 48-63.) (EN)
 ———. 1992. *Pursuit of Truth*, Revised edition, Harvard University Press. (クワイン, ウィラード・V. O. 1999. 『真理を追って』, 伊藤春樹・清塚邦彦訳, 産業図書.) (PT)
 ———. 1986. “Autobiography of W. V. Quine,” in *The Philosophy of W.V. Quine*, Lewis E. Hahn & Paul A. Schilpp (eds), Open Court, 1-47. (AQ)
- Quine, Willard V. O. & Ullian, Joseph S. 1978. *The Web of Belief*, 2nd edition, Random House. (WB)
- Holmgren, Christine & McHenry, Leemon. 2012. “Quine and Whitehead on Ontological Reduction: Properties Reconsidered,” *Process Studies*, 41.2, 261-86.
- 飯田隆. 2007. 「クワインとクワイン以後」, 『哲学の歴史』, 第11巻, 飯田隆編, 中央公論新社, 607-70.
- 小林道夫. 2008. 「哲学史研究の意義と今後の課題」, 『哲学の歴史』, 別巻, 中央公論新社, 35-52.
- MacHenry, Leemon. 2003. “Quine and Whitehead: Ontology and Methodology,” in *Process and Analysis*, George W. Shields (ed.), SUNY Press, 157-170.
- 田口茂. 2014. 「ホワイトヘッド哲学における思弁と理性—『アナーキー』の意義をめぐって」, 『理想』, 第693号, 理想社, 43-54.
- 丹治信春. 1996. 『言語と認識のダイナミズム』, 勁草書房.
- 丹治信春. 2009. 『クワイン』, 平凡社.
- Taylor, Alfred E. 1960. *Plato: The Man and His Work*, 7th edition, Methuen.
- 吉田幸司. 2010. 「過渡期ホワイトヘッド哲学における意識—ジェイムズ哲学と対比した発展史研究」, 『プロセス思想』, 第14号, 日本ホワイトヘッド・プロセス学会編, 147-58.
 ———. 2014. 「現実に臨むホワイトヘッド哲学—研究方法の反省から方針の提唱へ—」, 『プロセス思想』, 第16号, 日本ホワイトヘッド・プロセス学会編, 211-22.
 ———. 2016a. 「非分析哲学としてのホワイトヘッド『有機体の哲学』」, 『論集』, 第34号, 東京大学哲学研究室編, 94-107.
 ———. 2016b. 「ブラッドリー・ジェイムズ・ホワイトヘッドの感受論研究—形而上学の実践に向けて」, 『プロセス思想』, 第17号, 日本ホワイトヘッド・プロセス学会編, 113-24.
 ———. 2017. 「ホワイトヘッドの『生命 (life)』の形而上学—人間学への応用の試み」, 『人間学紀要』, 第46号, 上智人間学会編, 41-60.